

図書館情報学橋会会報 第16号(通号22号)

2014年3月発行 発行者 社団法人茗溪会支部図書館情報学橋会

素晴らしき先輩の心意気を繋いでいきたい10

黒澤明監督の名スクリプター 野上照代さん

図書館情報学橋会会長 森 茜

♪♪黒澤監督を支え続けたスクリプター♪♪

私が、野上照代さんが私たちの大先輩だと知ったのは2008年12月21日のことだった。

それは衝撃的なテレビ放送だった。この日、黒澤明監督没後10年記念の一つとして、NHKが「よみがえる巨匠の製作現場——野上照代が記録した19本の黒澤映画」と題したドキュメンタリー番組を放映した。そのドキュメンタリーは、脚本があってもその時のインスピレーションで千変万化すると言われる黒澤監督の映画作りの現場で、監督の傍にピタッと貼りつくように控えて、その場の気分ですすむ撮影展開を素早く絵コンテで記録していく一人の女性の姿だった。彼女の絵コンテがなければ撮影続行は不可能と言われるほど、野上照代の絵コンテによるスクリプト(記録)は黒澤映画に不可欠だったという。細心かつ凄まじいまでのエネルギーな姿だった。洗いっぱなしの髪はふり乱だし、質素なジーパン、ざっくりとした上着。個性あふれる女丈夫姿だった。彼女は1950年に黒澤明監督の『羅生門』にスクリプターとして参加、1951年に東宝に入社後、『生きる』以降の全黒澤作品に参加し、記録係にとどまらず、編集・製作助手として黒澤監督の片腕となった。監督について世界各地の映画祭に同行し、彼女自身が大きくなる姿が紹介された。私は、その生き様のスケールの大きさに感動した。

♪♪彼女は図書館講習所の卒業生だった♪♪

番組を見終わるや私は、急いでWikipediaで調べてみて、再度、私は感動した。なんと、彼女は1944年図書館講習所卒業生だったのだ。山口高等学校図書室に勤務した後、戦後、東京に戻ってから偶然のきっかけで映画の世界に入ったとのこと。社会的に

活躍する人で、図書館講習所等の卒業であることをはっきり名乗っている人を、私はあまり知らない。私は嬉しくなり、それから私の野上さん探しが始まった。

♪♪『母(かあ)べえ』の原作者♪♪

それから暫くして、山田洋次監督、吉永小百合主演の『母べえ』という映画が大ヒットした。この映画は、野上照代の実体験に基づくエッセイ『父へのレクイエム』をもとに作られた。原作は、野上照代の実父が戦前から新島繁のペンネームで執筆活動をしていたのが治安維持法にひっかかり、何度も検挙され、1940年拘留所に入獄、保釈出獄されるまでに交わした妻子との往復書簡がもとになっている。一読、私は、三度目の感動を味わった。私の野上照代探しは一層強くなったが、古い先生方に聞いても誰もその行方を知らない。先輩方に聞いても手だてがなかった。

♪♪真田佐和子さんの助け♪♪

昨年春、ひよんなことから野上さんと同期の真田佐和子(旧姓間宮)さん(元鹿島研究所資料室勤務)と話をする機会があり、彼女が野上さんと同期で、とても仲が良く、今でも親しいことを知って、彼女の手助けで、野上さんと直接電話で話すことができた。野上さんが真田さんに宛てた手紙の数々も見せていただいた。なんと、手紙にはあの絵コンテがササッと書いてあるのだ。野上さんの真田さんへの優しさが溢れているようで、また、真田さんの野上さんを誇りに思う気持ちがとても豊かで、私は、とうとう4度目の感動をしてしまった。

お二人に幸あれ！！

資料が語る前身校の歩んだ道のり

筑波大学図書館情報メディア研究科 吉田右子

♪♪「21世紀図書館情報専門職アーカイブ」の構築をめざして♪♪

図書館情報メディア研究科は、約一世紀にわたる図書館職員／図書館情報専門職養成の歴史を物語る資料を引き継いでいます。本稿ではこれらの歴史的資料の保全と研究のために、本研究科の有志の教員で立ち上げたプロジェクトについてご紹介します。

本プロジェクトは筑波大学図書館情報メディア研究科に残された図書館員養成の沿革にかかわる歴史的資料を対象に、図書館専門職にかかわる包括的なコレクションを整備し、利用のための仕組みを実装させることにより、今後の図書館の展開に寄与する「21世紀図書館情報専門職養成研究基盤アーカイブ」を構築しようという壮大なものです。



図書館短期大学時代の文献資料

皆様もよくご存知の通り、前身校は、文部省図書館員教習所・文部省図書館講習所（1921年～1945年）、帝国図書館（国立図書館）附属／文部省図書館職員養成所（1947年～

1965年）、国立図書館短期大学（1964年～1981年）、国立図書館情報大学（1979年～2004年）であり、4機関はそれぞれ24年、18年、17年、25年で異なる組織へと改組され、教育機関としてはきわめて短命に終わっています。一流の教授陣を講師に迎え、志高い学生が学んでいたにも関わらず、前身校は時代に翻弄され閉校と再出発を何度も繰り返したので

す。

♪♪残された資料群からみえてくるもの♪♪

ところで残された資料群は体系的に集められたものではありません。しかしながら整理し始めてからわかったことは、これらの資料は何らかの意思と必然性がある、前身校から引き継がれ今、私たちのもとにあるということでした。資料の種類はさまざまです。紀要等の公刊雑誌、『芸艸會會報』から『図書館情報大学同窓会会報』にいたる前身校同窓会機関紙、大学への昇格を目指して幾度も繰り返し行

なわれた文部省への陳情書、サークルや有志の勉強会の資料

（これらを見ていると昔の先輩たちはとても熱心に勉強していたことがわかります）、様々な写真（とりわけ学生運動について

は詳しい記録が残されています）、卒業式をはじめとする各種行事の音声資料やビデオ（これらはオープンリール式のデッキでのみ再生可能な資料もあり、保存するだけでなく媒体変換の必要があります）などです。

資料の整理と目録の作成は、筑波大学情報学群知識情報・図書館学類の学生が引き受けてくれました。作業スペースの壁には前身校の変遷を示す年表を貼って、寒い部屋でマフラーを巻いたままデータベースの作成に取り組んでくれました。2014年2月の時点で、約2,000点の資料の予備的な整理と概要目録の完成までこぎつけました。



前身校の音声資料

残された資料には、前身校で学んだ先輩たちの図書館学／図書館情報学にかける思いがぎっしりつまっています。文部省図書館員教習所の資料も図書館情報大学時代の資料も、どちらも前身校史を形成する重要な資料です。世界的にみてもユニークな前身校の歴史を可能な限り包括的に残すことが私たちの目標なのです。



文部省図書館員養成所から引き継いだ製本用具

♪♪夢は国際的なアーカイブ♪♪

海外の優れたデジタルアーカイブから日常的に恩恵を受けている研究者の立場からは、日本の優れた図書館文化とそれを支えてきた図書館専門職養成の歴史を世界に向けて発信していきたいという大きな夢があります。アメリカや北ヨーロッパなどの図書館先進国と呼ばれる国々も日本の専門職養成史から得ることがたくさんありそうです。そしてこれから図書館を発展させていこうとしている東南アジアの国々からも日本の図書館員の歩んで来た道のりは関心を持って受けとめられるのではないのでしょうか。

また日本は明治時代から継続的にアメリカの図書館業務とサービスの方法論を移入し、それを自分たちの図書館文化にあわせて改良していくプロセスの中で専門職のためのさまざまなユニークなツールや機器を生み出してきました。文献資料と現物資料をデジタル化することで、日本のユニークな図書館専門職養成に関わる情報を世界に向けて発信することが可能になります。

♪♪今後のプロジェクト計画♪♪

明治以降の図書館職員養成史を俯瞰する実証的研究は量的に十分とはいえず、日本の図書館専門職教育の歴史は多くの場合、第二次世界大戦後から語られてきました。しかし前身校は日本でただ一校、戦前から戦後を通して図書館専門職養成を行っていたのです。そのため前身校資料の通史的な研究によって、日本の図書館員養成の理念や養成をめぐる言説は再構築される可能性があります。

前身校各機関では図書館学／図書館情報学をめぐってどのような議論が展開されたのでしょうか。そこで構築された知的体系は資料にどのように表出しているのでしょうか。各機関の理念は一筋の糸となって文部省図書館員教習所から筑波大学図書館情報メディア研究科までをつなぎとめてくれているのでしょうか。前身校に関わる多くの問いはいまだに答えられていません。そうした未解明課題を解く鍵が、前身校資料にはたくさん含まれています。前身校アーカイブは私たちの歴史を明らかにし未来に向かう方向性を指し示してくれるはずです。

このプロジェクトは本研究科の特性を生かして情報工学、歴史学、アーカイブズ学、博物館学、デザイン論といった領域の異なる教員の混成チームによって、実施されています。今後はプロジェクトのさらなる学際的发展を目指し、現物資料とアーカイブによる図書館史研究、関係者への聞き取り調査、電子アーカイブのモデリングとシステム実装、資料の展示空間の設計等の研究テーマに順次取り組んで行く予定です。本研究プロジェクトにご関心がある方はどうぞ以下までご連絡ください。

♪♪連絡先♪♪

〒305-8550 つくば市春日 1-2
筑波大学図書館情報メディア研究科 吉田右子
FAX: 029-859-1076
yyoshida@slis.tsukuba.ac.jp

◇永年のご薫陶ありがとうございました◇

平成 26 年 3 月を持ちまして体育系の遠藤卓郎先生が筑波大学を退職されます。

遠藤先生のご専門は身体教育学です。昭和 55 年 4 月 1 日、前年に設置された図書館情報大学が学生の受入を開始した当初に、筑波大学から図書館情報大学図書館情報学部講師として転任され、多くの学生の指導にあたられました。平成 14 年 10 月 1 日の筑波大学との統合後は、筑波大学体育科学系（体育センター勤務）教授に転任されてご活躍されました。

※※※

「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」の意味

調布市立図書館長 小池信彦

本会報の読者をご存知のことですが、「図書館」と言っても、大学図書館、専門図書館、私立図書館、公立図書館など様々な図書館があります。設置母体、コレクション、利用対象者などで区分されるものと思いますが、表題にある「図書館」は、公立図書館と私立図書館を含む「公共図書館」を指しています。昭和 25（1950）年に制定された「図書館法」の第 2 条では“「図書館」とは、図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設”で“地方公共団体の設置する図書館を公立図書館といい、日本赤十字社又は一般社団法人若しくは一般財団法人の設置する図書館を私立図書館”と規定されています。

「図書館法」第 7 条の 2 に“文部科学大臣は、図書館の健全な発達を図るために、図書館の設置及び運営上望ましい基準を定め、これを公表するものとする。”とあります。図書館法制定当初は公立図書館に適用される規定とされていましたが、平成 20（2008）年の図書館法改正で、公立、私立両方に適用される規定に移されました。

この規定にある“基準”を文部科学大臣が定めたのは、平成 13（2001）年になってからです。実に図書館法制定から 50 年経ってからようやく定められました。その間に審議会の報告などが複数ありました。その都度、正式な基準となることはなかったのです。

平成 13 年の基準についても、平成 24（2012）年に全部改正されました。ここまでは根拠と経過です。

図書館とは何をするとするか、そのためにどうあるべきかを国として基準を示すことで、図書館の設置・運営者である地方公共団体や法人が動きやすくしようということがこの基準の意味だと言えます。先に記したように図書館法で図書館が何をするとするかは規定されており、別の条文では例示もしています。ポイントとしては、資料を収集・整理し、一般公衆に提供するところが図書館と言えますが、社会の変化などを踏まえた“基準”がその時々調整

されることは重要なことと言えます。

平成 24（2012）年改定を文部科学省からの通知を元に紹介します。

- ア 基準の対象に私立図書館を追加
- イ 運営状況に関する評価の実施やその結果の住民への情報提供
- ウ ボランティア活動等の機会・場所の提供
- エ 図書館は地域の情報拠点
- オ 国立国会図書館、学校、民間団体等との連携・協力
- カ 情報サービス、地域の課題に対応したサービスの充実
- ク 利用者に対応したサービスの充実、施設・設備の整備
- ケ 設置目的を適切に達成するために必要な管理運営体制の構築
- コ 指定管理者で運営する場合の注意点
(緊密な連携により事業の継続的・安定的な実施等を確保する)
- サ 基本的運営方針、指標・目標、事業計画の策定・公表
- シ 館長の要件
(図書館の運営及び行政に必要な知識・経験と司書資格)
- セ 司書等の確保、人事交流、各種研修機会の拡充
- ソ 著作権等の権利の保護に関する規定
- タ 危機管理に関する規定
- チ 図書館資料に電磁的記録を含む
- ト 郷土資料等の電子化等に関する規定

何を重視するかは、設置・運営者の裁量となりますが、重要な課題である指定管理者による運営を選択する場合の注意点、館長は司書資格があることが望ましいことを述べたことは重要です。

県立図書館を含め 1300 以上の地方公共団体が図書館を設置しています。職員、資料費、施設などとても十分といえる状況にないところがほとんどですが、それぞれの条件のなかで最善の運営ができるようにするには、人の問題が重要です。図書館の責任者である図書館長が専門職であり、運営が指定管理者で行う場合には、事業の継続、安定が図れるのか、それは運営に従事する人の確保について、地方自治体が直接運営する場合と遜色のない状況をつくりだせることが必要だということです。

“基準”の手引きを公益社団法人日本図書館協会は作成しました。「望ましい基準」については、各図書館の職員レベルで各項目について自館の現状との比較を検証するなど活用することが期待されています。各図書館において、目標として捉えることが大切です。

また、今回の基準に「国の役割」「改定の周期」「都道府県立図書館の役割」「指標や数値目標の明示」「資料費の確保」「司書職の制度化」等が設定されていません。このような視点を基準において明確に示す必要があり、現場の願いでもあると思います。

◇全卒業生交流会「大橋会」の開催の報告◇

2013年11月3日（日・祝）午後
筑波大学春日エリア メディアユニオン

2013年度も筑波大学の「ホームカミングデー」にタイアップして、筑波大学図書館情報メディア研究系知識情報・図書館学類、図書館情報メディア研究科およびその前身諸学校の全卒業生を対象とした「大橋会」を開催いたしました。今年度は、国立国会図書館長の大滝則忠氏による公開講演会「記憶の伝承と図書館私感」と橋会主催の「卒業生交流会」を開催し、卒業生を中心として関係者が集い友好を深めました。



♪♪記憶の伝承と図書館私感♪♪

大滝館長は筑波大学前身の東京教育大学文学部（法律政治学専攻）をご卒業になられた茗溪会会員でいらっしゃいます。国立国会図書館に奉職され、関西館準備室、参考書誌、収集、総務の管理職を経て、2004年12月副館長で退職されました。東京農業大学教授になられた後、2012年4月、国立国会図書館職員出身として初の館長（第15代）に就任されました。ご講演では人びとの諸活動に役立つ図書館の機能について、国立国会図書館の職員として仕事をする立場から、また同時に、ライフワークとして戦前期発禁本を探求する一利用者の立場から、身近な体験を通じたお話をいただきました。卒業生や市民の方々など約40名が参加され、活発な質疑応答もありました。





♪♪全卒業生交流会♪♪

公開講演会終了後の全卒業生交流会は、春日キャンパス近くの居酒屋で開催されました。講演者である大滝館長にもご参加いただき、約 20 名の幅広い年齢層の人たちが集い、盛会のうちに卒業生の懇親を深めることができました。



平成 25 年度分会費納入のお願い

平成 25 年度会費未納入の会員におかれましては、以下の郵便振替口座または銀行口座宛に納入くださるようお願いいたします。なお、通常会員の会費は 3,500 円です。また通常会費完納者(35 回分納入済みの方)には、橋会円滑な運営のため橋会固有の協会の会費 2,000 円を維持費としてお願いしています。

(郵便振替)

口座番号 00110-5-656101

加入者名 図書館情報学橋会

(銀行振込)

ゆうちょ銀行 〇一九店 (ゼロイチキョウ店)

口座番号 0656101 預金種目 当座

口座名義 トシヨカンジョウホウガクタチバナカイ

※「振込依頼人名」欄に会員番号の入力をお願いします。

◇会員現勢◇

1. 会員数

1,689 名 (平成 26 年 1 月 30 日現在)

2. 卒業校別内訳

| 卒業校 | 人数 |
|----------|-----|
| 文図教習所 | 1 |
| 文図講習所 | 60 |
| 国図附養 | 1 |
| 文図養成所 | 75 |
| 文図養成 A | 159 |
| 文図養成 B | 57 |
| 文図養成 1 B | 3 |
| 文図養成 2 B | 10 |
| 図短付養成 | 20 |
| 図短特養課 | 121 |
| 図短図書館 | 311 |
| 図短文献情 | 78 |
| 図大図情専 | 11 |

| | |
|--------|-------|
| 図大図情 | 532 |
| 図大図情修 | 18 |
| 図大博前期 | 11 |
| 図大博後期 | 1 |
| 筑図 | 143 |
| 筑博図情修士 | 3 |
| 筑博図後期 | 3 |
| 筑博図情前期 | 4 |
| 筑知図 | 67 |
| 合計 | 1,689 |

3. 新入会員は平成 24 年の卒業生から入会金を廃止。

会費は 3 年間免除。

(以下、HP 掲載では省略)

社団法人茗溪会支部図書館情報学橋会

〒305-8550 つくば市春日 1-2 E-mail info@tachibana-kai.com

公式ホームページ <http://www.tachibana-kai.com/index.html>

発行: 2014 年 3 月 1 日